

こんにちは。二十二歳から入学し三年生になるまでの私の熊谷高校定時制での体験を聞いて下さい。

最初に、私が定時制に入学した経緯を話します。私はいわゆる“ひきニート”でした。これは、“ひきこもり”と“ニート”を足した造語で、高校の友人が教えてくれた言葉です。

当時の私には幸いにも、“ひきニート”に至った経緯を話せる人がいました。その人にある日、「年を考えると、仕事をするかもしくは勉強するかい加減決めなければならないところまで来ているんだよ。」と言われ、その頃はまだまだ考え方がだらしなく、「じゃあ、仕事したくないから学校に行く。」と返しました。これが入学するきっかけです。

適当な心持ちで入学した私は、年下の子達に囲まれる環境を否が応でも受け入れなければなりません。ですが、クラスメイト達ととけ込むのに時間は掛かりませんでした。定時制高校という気質でしょうか、居場所の無さ、居心地の悪さというものは感じませんでした。それでも、中にはお行儀の悪い子もほんのちょっぴりいます。そんなクラスメイトを見て、「ちゃんと授業に出席して真面目に勉強すれば、自分の為になるのに。」と自分に言い聞かせているうちに、3年間で、昔よりも姉御気質で気が強く、気づけばクラスの模範的な立場になっていました。いまでは教室のエアコンをつけるのかどうかの判断も私に権限があります。

高校生活での大きな転機は、自分自身の教養の低さに気づいたことです。入学当初は勉強の楽しさに気づいたばかりで、自分がどこまでのレベルの問題が解けるかなどあまり考えませんでした。しかし、当時の理科の先生の、「〇〇は、ここを卒業したらどうするんだ。」という問いに、間も置かずポロっと「大学に行きたい。」と言った日から、自分に、ここでは学べない事をもっと学びたいという自覚と、大学に行く為に必要な事を考えていくという課題が生まれました。

まず私は大学に行く為にはそのレベルに見合った学力をつけなければと思い、一年生の夏休みに補習を受けることにしました。しかし、そこで自分の勉強のレベルを思い知りました。当時の私は 0.1×0.1 が 0.01 になる事が理解できませんでした。 1×1 が 1 であるように、 0.1×0.1 も答えは 0.1 だと思っていたのです。本当にそのくらいひどいレベルで計算が出来ませんでした。先程の先生に、一枚の白い紙を使って、「これを半分に折って、また半分に折ってという風にどんどん小さくなっていくことなんだぞ。」と紙の面積が減っていく表現で教えてもらった事をよく覚えています。

そして今でも忘れられないのは、一年生の定期テストの後にその先生から言われた言葉です。クラスで最高得点の98点をとったので、「よく頑張ったな。」くらい言ってくれるものと思っていました。しかしそ

の先生は褒めるどころか、間違ったところに対して吹き出すように笑ったのです。先生の態度に納得がいかず、数日後、「先生、私のことバカにしてるの？」と問い詰めました。すると少し悩んだ様子でわずかな間を置いてから、「バカにしてるって表現は違うな…。だってお前、大学に行きたいって言ってるやつがあんな簡単な問題を間違って 100 点取れないじゃ、バカにされてもしょうがないだろ。」私はその言葉に対して何も言い返せませんでした。考えてみると確かにそうなのです。定期テストで常に 100 点を取る実力がなければ、大学に行ける可能性は低いでしょう。運よく入れたとしても、大学で教わる授業の内容について行けず苦勞することは目に見えています。

それからというもの、正解したところよりも、間違った問題に対して気が向くようになり、明らかにテストや勉強に対する思考が変わりました。授業の内容だけではダメなのだ、今までと同じ勉強のやり方でもダメなのだ。これ以降、私は前よりも進学に向けての補習を夏休みだけでなく授業の前や後にも受けるようになりました。

目標を見つけた今、私が思うことは、学校に入る前と比べて、とても気持ちに安心感が生まれていることです。それは、目標という軸があることと、入学してから出会った人達と毎日のように色んなことを話せる環境に自分がいるからだと思います。もしも、昔の私のように”ひきニート”になっている人に何か伝えるとすれば、仕事をするか、勉強をするか、もしくはどちらも両立することから選ばなければならないということです。でも、普通に生きていれば誰しも仕事はするし、学校でなくても仕事を覚える為に勉強するでしょう。みんな当たり前のように外を歩いたり自転車に乗ったりしていますが、あれもどこかで交通ルールというものを勉強して、その学びを共有しているからこそ成り立っているものだと思います。だから、先程挙げた 3 つの選択肢は、ひとりでするものではなく誰かと共有することが大切だと思います。そうすれば、道路にさえ出れば、たとえガソリンが切れようと、鳥のフンがフロントガラスにかかろうとも、事故が起きようと、誰かの目が側にある限り、一緒に考え、今までお互いに学んできたことを共有し合って、どうすればいいかを解決する良い答えが生まれるでしょう。

最後に、私が好きなアメリカのアーティスト、ビリー・ジョエルの「Last of the big time spenders」という曲の中で、時間をお金に例えるのならば、自分は”浪費家の端くれだろう”と言っています。曲の中では恋人に時間を費やしていることを歌うラブ・ソングですが、今の私の時間の使い方は、とても贅沢なんだと教えてくれた曲です。今となっては出来ない時間の使い方をしていたあの頃を思うと、とても堅実になったなと思います。現実のお金の使い方ではそう言ったとは言えませんが。ご清聴、ありがとうございました。